

自己意識特性の機能についての一考察 — 援助行動を通じての検討 —

A Study on the Functions of Self-consciousness — Examination through Helping Behaviour —

神 田 信 彦*

Nobuhiko KANDA

要旨：本研究は大学生 223 名（男性 81 名、女性 142 名）を対象に自己意識特性、自覚状態及び統制感と援助行動との関係を検討した。因子分析の結果、援助行動は「不特定の人を対象とする援助行動」と「特定の人を対象とする援助行動」の 2 因子が得られた。前者については統制感等との間に有意な弱い正の相関関係及び、後者について私的自己意識、公的自己意識及び統制感との間に有意で弱い正の相関関係が得られた。また両援助行動をそれぞれ基準変数とする重回帰分析の結果、前者については統制感が、後者について統制感、公的自己意識及び私的自己意識特性が有意な標準偏回帰係数となった。これらの結果について自己意識特性及び自覚状態の機能の観点から考察を行った。

キーワード：自己注目、自覚状態、私的自己意識特性、公的自己意識特性、援助行動

問 題

Duval & Wicklund (1972) の自覚状態理論や Carver & Scheier (1981) の自己制御理論では、ともに、私たちの注意は外界に向けられるか自分自身に向けられるかのいずれかであると仮定されている。

しかし、これには不足があるように思われる。つまり、環境、特に対人場面や社会的場面の中の自己に注意が向けられるという視点が欠落しているのではないか。その人がその時におかれている対人場面や社会的場面を考えてみれば、それらの文脈と自らに注意を向けると考えることが適当であろう。

こうした考えが許されるとすれば、私たちの注意は、外界つまり環境に向けられるか、環境、特に社会的文脈とそこにある自己に向けられるか、あるいは、自己の内面や身体感覚に向けられるかの 3 通りであると仮定することができる。

さらにこれに基づき Buss (1980) の私的自覚状態と公的自覚状態を考え展開すれば、他者が直接うかがい知ることのできない自己に向けられる注意に対応するのが私的自覚状態であり、社

* かねだ のぶひこ 文教大学人間科学部

会的文脈とその中の自己に向けられる注意に対応するのが公的自覚状態と考えることが可能であろう。さらに Buss の理論の基になった Fenigstein, Scheier, & Buss (1975) の私的自己意識特性と公的自己意識特性を関連づけることができる。私的自己意識特性は、その人自身の考え、感情や動機などの自己の内的側面に注意を向けやすい傾向の個人差を表すもので私的自己意識特性が高い人は、私的自覚状態を生じやすいとされる。一方、公的自己意識特性は、他の人が見ることができるその人の外見、行動などの外的側面に注意を向けやすい傾向を表すものであり、公的自己意識特性が高い人は公的自覚状態を生じやすいとされる。したがって私的自己意識特性は、その人の注意が自己の内面に向けられることに関与し、公的自己意識特性は、その人の注意がその人の置かれた社会的文脈の中の自己に向けられることに関与していることが推測される。

多くの研究で、私的自己意識特性と公的自己意識特性の間には有意な正の弱い相関が一般的に確認されている (神田, 2019 を参照)。したがってこれらは独立した特性であると考えられている。

他の変数との関係についてみると、山岡 (1993) はユニークネス尺度と私的自己意識特性と間に有意ではあるが大変弱い正の相関 ($r=.19$) を、公的自己意識の間には有意な相関を得ていない。

押見 (2000) は、同調行動と自己意識特性との関係を検討し、公的自己意識特性が同調行動に肯定的関係があること、私的自己意識特性が否定的関係にあることを明らかにした。ただし、前者については、公的自己意識の高い人が同調行動を行うのは、同調が関わる課題へその人の関心が低く孤立回避動機が強い状況であるか、課題関心度が高く公明正大動機が強い状況であった。また後者については、「課題への関心度の高いことが、関心度の低い課題では、孤立回避ないし公明正大さを求める動機のいずれかが強く刺激されると、私的自己意識高群のほうが低群よりも同調行動の可能性の高まることが明らかとなった。私的自己意識が高くても同調行動の促進は起りうる。」と述べている。

外山 (2002) は、私的自己意識特性及び公的自己意識特性が、社会的比較志向性といずれも有意な正の相関を持つこと、さらに分散分析によって両特性ともに高い群が他の群に比較し有意に社会的比較志向性が高いという結果を得ている。

私的自己意識特性と公的自己意識特性の差異やそれぞれの自己意識の高低による違いについては多くの研究がなされてきた。しかしある事態に臨んだとき両者がどのように機能するかについては十分に検討されていないようである。相補的にはたらくのであろうか、拮抗的にはたらくのであろうか、あるいはいずれでもないのであろうか。

押見 (2002) は、公的自己意識特性の本質は自己フォーカス (注目)、社会的受容及び自己中心性の3つであることを指摘している。自己注目は同義反復的であるが公的自覚の生起不生起に関わるということであろう。社会的受容と自己中心性について検討してみよう。社会的受容は自分が対人関係や社会的関係の中で受け入れられることに関わっており、自分の望む方向で受け入れられるように他者から見える自己の姿や行動に気を配ることの程度に関係づけられよう。次に自己中心性であるが、これは Fenigstein (1984) の自己標的バイアスが関係している。これは何らかの出来事の中で自分がその対象であったり、注目的になっていたりすると判断してしまうというもので自己中心性バイアス一つであり、公的自己意識特性は有意で弱い正の相関があることが確認されている (Fenigstein, 1984)。

では私的自己意識についてはどのように考えることができるのであろうか。

Duval & Wicklund (1972) の客体的自覚状態理論では、自覚状態が高まった状態に置かれた

人は、その状況下で社会的基準など望ましい基準との比較で自分について評価を行い、自分がその基準を満たしていない場合（一般的には基準を満たさないことが多いとされる）、その人は自分に対して否定的感情を抱くため、その否定的感情の低減あるいは解消のために自己改善の動機づけが高まるとされる。

しかし、自覚状態が高まったときに行われるのはそれだけなのであろうか。繰り返しになるが、Duval & Wicklund (1972) の自覚状態理論では自覚状態が高まると、その状況に最も関連する自己の側面について考えるようになるとされ、現状とその人が採用している基準とが比較される。この基準が考慮される部分が私的自己意識に関わるものであると考えることができる。仮にその基準が外的に存在するものであっても自分の中に取り入れているのであるのならそれを参照することは私的自己意識に関わるものであると言えよう。

これは現在の自分と基準との比較だけではなく、自分がある状況下でどのように振る舞うかを判断する基準を提供するはたらきをも持つと考えたらどうであろうか。

これらのことから、2つの自己意識特性の働きについて考えてみよう。私たちが何らかの社会的場面での出来事に遭遇するとき、公的自己意識特性の高い人であれば、社会的受容を背景とする動きとともに自己標的バイアスが活性化する可能性が高い、言い換えれば公的自覚が高まっている状態であり、このとき私的自己意識に関わる基準への参照が行われその場面で期待される行動を自分がとるか否かの判断が行われるであろう。これによって行動の生起を決定する場合もあるが、状況によってはコストやリスクの評価等も加味されて判断されることになろう。なお、私的自覚状態の際の参照は何らかの基準だけではなく、その人自身の感情や思考についても行うと考えられる。

本研究では、こうした私的自己意識特性と公的自己意識特性の仮説的はたらきの可能性を検討するために社会的行動の一つである援助行動との関係から間接的に検討した。

自己意識特性と援助行動

他の人が困っている状況や窮地に陥っている状況あるいはそれらが生じることが予想される状況で、それらを改善するために他の人が行う行動は、援助行動、向社会的行動あるいは愛他的行動と呼ばれる。

中村 (1989) は、援助行動と自己注目の関係について、自己注目の高まりが援助行動を促進する場合と抑制する可能性があることを述べている。促進する場合については、Duval & Wicklund の客体的自覚状態理論を基に誘発刺激によって自己への注目が喚起される場合に「望ましい基準の方向への自己改善の動機が高まるものと予想されている。したがって、援助行動を示すことは望ましいとする基準が成立しているとすれば、客体的自覚状態の高まりは他者への援助を促進するものと予想される。」とし、抑制される場合については、Gibbons & Wicklund (1982) の指摘した心配事などのために自己に過剰に注目してしまっている状態や、山口 (1988) の失敗経験が自己注目を高めるが援助行動を抑制するという結果を挙げている。いずれも自己注目が強くなりすぎてしまい、援助を必要としている人との関係に注意が配分されない状態となっていると考えられよう。

ここで、前に述べたことを援助行動に当てはめ、考えてみよう。

高い公的自己意識特性は、他の人に何らかの援助行動が必要とされる場面で、社会的受容か自己標的バイアスあるいは双方を活性化し自己注目を促進すると考えられる。その時、当該の人は必要とされる援助行動を自分がとるべきか否かに関して基準の参照を行おうとする。つまり私的

な自覚状態が高まるが、いうまでもなく私的自己意識特性が高い人はこれを行う傾向が高いと考えられる。その人の中で、当然行うべきであるとの基準が存在すれば、多少のリスクやコストが予測される場面でも援助行動が行われるであろう。しかし行うことが望ましいという程度の基準であれば、リスクやコストを考慮し援助行動を行わない場合も考えられる。ここでは「望ましい基準の方向への自己改善の動機」を考える必要はなさそうである。また、すでに他のこと、特に強い否定的感情によって私的自己注目が占有されているとすれば、基準への参照としての自己注目は生じないであろう。さらには援助行動が必要とされる場面での公的自覚状態も生じない可能性も考えられる。

なお、中村も述べているように、援助行動は一般的に望ましい行動であると考えられるので援助行動は望ましい基準として多くの人々に採用されていると考えることができよう。

統制感

援助行動の実行に関わる要因として、Rotter (1954, 1966) の Locus of control (以下、統制感) を考えることができる。この概念は、人が自分の行動と強化との随伴関係について抱く期待の程度を扱うものである。言い換えるならある成果を自分自身の行動によって生み出すことができると考える程度についての一般的期待あるいは信念である。これに対し学業や健康など特定の領域に関わる期待は特定期待と呼ばれ、特定の行動が生じるかについては特定期待が高い予測力を持つとされる。しかし一般期待である統制感は、新奇な状況での行動生起の予測力を持つとされるが、その一方でさまざまな特定領域の行動に対しても一定の予測力を持つものとされ注目されてきた。

統制感と援助行動との関係についてみれば、統制感が高い人は低い人に比較し、援助行動を行う可能性が高いことが予想される。

本研究の目的

本研究は、私的自己意識特性と公的自己意識特性の機能について援助行動を通じて検討するとともに援助行動の生起に関わる要因として統制感を、取り上げ検討を行う。上記の各変数は、援助行動の実行と有意な正の相関関係があるものと推測される。

方 法

調査時期

2019年1月中旬

調査対象 A大学生223名(男性81名, 女性142名)

調査方法 下記質問紙を、受講生を対象に授業終了時に実施しその場で回収した。

質問紙の構成

援助行動項目 「授業を休んだ友だちにノートを貸す」「献血をする」など日常場面での援助行動とボランティアなど12項目を採用した。

自己意識特性の測定 押見・渡辺・石川(1986)による自己意識尺度を使用した。本尺度は私的自己意識と公的自己意識を測定するそれぞれ9項目、合計18項目からなる尺度である。

統制感の測定 鎌原・樋口・清水(1982)が作成したLocus of control尺度を使用した。本尺度は18項目からなる尺度である。原尺度では各項目とも「あなたは、何でも、なりゆきにまかせるのがよいと思いますか」のように疑問文の形式となっているが、本研究においては、使用する

他の尺度と表現の仕方を統一するために「なんでもなりゆきにまかせるのがよい」のように表現をあらためた。

社会的望ましさの測定 谷（2008）の作成した印象管理尺度（バランス型社会的望ましさ反応尺度日本語版（BIDR-J）の下位尺度）を使用した。本尺度は12項目で構成されている。本尺度を加えた理由は、上記の項目や各尺度への回答が社会的望ましさの影響を受けゆがめられていないかを確認するためである。各変数との間に得られる相関が無相関であるか負の相関であれば、それらへの社会的望ましさの影響はないものと考えられる。

なお、各尺度とも回答は「非常によくあてはまる」「よくあてはまる」「あてはまる」「少しあてはまる」及び「あてはまらない」の5件法による。また、各項目の粗点の合計値をもって尺度得点し、高得点であるほどそれぞれの傾向が高いことを示す。

倫理的配慮 倫理的配慮については、以下について質問紙表紙に記載するとともに実施に際し著者が読み上げ説明を行い、同意を求めた。

①当該調査は成績等の評価に一切関係のないこと、②回答は強制ではないことと無記名でありプライバシーは保障されること、③回答したくない項目は回答しなくてもよいこと、④途中で回答をやめてもよいこと、⑤研究以外の目的に回答を使用しないこと、⑥回答済みの質問紙は厳重に管理し一定の期間経過後適正に廃棄すること。

Table 1 援助行動項目の因子分析の結果

各項目の内容	第1因子	第2因子
街頭の共同募金に協力する	.62	.13
被災地でボランティアとして活動する	.61	.05
自分の住んでいる地域社会でボランティア活動をする	.56	.21
路上で困っているように見える人に自分から声をかける	.54	.32
献血をする	.45	.08
友だちに元気がないように見えるとき声をかける	.07	.81
授業を休んだ友だちにノートを貸す	.06	.60
路上で前を歩いている人が何かを落としたときそのことを知らせる	.20	.45
サークルや部活での役割を進んで引き受ける	.22	.36
固有値	1.65	1.62
寄与率	18.35	16.90
信頼性 (α) 係数	.71	.64

結 果

援助行動項目の分析

援助行動に関わる12項目を対象に因子分析（主因子法、バリマックス回転）を行った。その結果、固有値の値から2因子構造として分析を進めることが適当であると判断し、改めて因子分析（主因子法、バリマックス回転）を2因子指定で行った（Table 1）。

第1因子に関わる項目は「街頭の共同募金に協力する」や「被災地でボランティアとして活動する」などで構成され、対象が不特定の人や、現在、直接経験している対人関係とは異なる援助行動であると考えられる。第2因子は、「友だちに元気がないように見えるとき声をかける」や「授業を休んだ友だちにノートを貸す」など特定の人を対象にし、さらに今、現実に経験されている場面での援助行動であると考えられる。

第1因子を構成する5項目及び第2因子を構成する4項目を対象にそれぞれ信頼性係数を算出したところ、第1因子（平均=2.92, SD=2.00）に関しては、 $\alpha = .71$ 、第2因子（平均=10.00,

SD=3.33) については、 $\alpha = .64$ であった。後者の値は信頼性係数として十分とは言えないが項目数が4と少ないことを考慮し以後の分析にあてることとした。

Table 2 援助行動得点と各変数の相関係数

	私的自己意識	公的自己意識	統制感	印象管理
不特定	.15	.06	.25 ***	-.15 *
特定	.35 ***	.38 ***	.35 ***	-.24 **

*** $p < .001$, ** $p < .01$, * $p < .05$

Table 3 各変数間の相関係数

	公的自己	統制感	印象管理
私的自己	.44 ***	.35 ***	-.34 ***
公的自己		.24 ***	-.21 **
統制感			-.09

*** $p < .001$, ** $p < .01$

Table 4 援助行動得点を被説明変数とする重回帰分析の結果

基準変数	第1因子	第2因子
重決定係数(調整済)	.06	.23
β 統制感	.25	.25
係数 公的自己意識	—	.23
私的自己意識	—	.16

各変数の平均値と信頼性係数

私的自己意識と公的自己意識特性を構成するそれぞれ9項目を対象に信頼性係数を算出したところ、私的自己意識(平均=16.27, SD=5.00)については $\alpha = .75$ 、公的自己意識(平均=22.51, SD=6.47)については $\alpha = .80$ であった。また、LOC尺度の信頼性係数は、 $\alpha = .59$ と低い値であったため、因子分析(主因子法、バリマックス回転)を行ったところ、本研究のデータでは3因子乃至4因子構造である可能性が得られた。そのうち第1因子を構成する項目がもっとも統制感を表しているものと判断されたため、因子負荷量が.4以上の6項目について統制感を反映する項目として採用し、それらの項目の粗点の合計値を本研究での統制感得点(平均=17.70, SD=6.83)とすることとした。なお、6項目を対象にした信頼性係数は.76であった。

さらに、印象管理尺度(平均=17.45, SD=6.40)の信頼性係数は.78であった。

各変数と印象管理との相関係数

「不特定の人を対象とする援助行動」「特定の人を対象とする援助行動」、公的自己意識特性及び私的自己意識特性はそれぞれ印象管理とは有意で弱い負の相関が得られた(Table 2, 3)。統制感と印象管理は無相関であった(Table 3)。したがって本研究で得られた回答は社会的望ましきによる回答の偏向はないものと考えられる。

援助行動得点と他の変数との相関関係

Table 2に援助行動得点と各変数との相関係数を示した。援助行動の第1因子である「不特定の人に対する援助行動」は統制感とのみ有意で正の弱い相関が得られたが、私的自己意識と公的自己意識とは無相関であった。

「特定の人に対する援助行動」つまり現在現実展開している場面や、身近な対人関係の中での援助行動については、私的自己意識、公的自己意識ともに有意で弱い正の相関が得られた。統制感については両援助行動との間に有意で弱い正の相関がみられた。

援助行動得点以外の各変数間の相関係数

各変数間の相関係数は Table 3 の通りである。私的自己意識と公的自己意識の間には有意で中程度の正の相関がみられた。統制感と両自己意識特性とは、いずれも有意で弱い正の相関が得られた。

援助行動得点を被説明変数とする重回帰分析の結果

次に援助行動を被説明変数、私的自己意識特性、公的自己意識特性及び統制感を説明変数とする重回帰分析（ステップワイズ法）を行った（Table 4）。

まず、「不特定の人を対象とする援助行動」については、統制感だけが有意な標準偏回帰係数を示した。なお重決定係数は低い値であった。

「特定の人を対象にする援助行動」を被説明変数とする分析では、統制感、公的自己意識及び私的自己意識ともに有意な標準偏回帰係数となった。

考 察

本研究では以下の問題を検討した。1つは Buss (1980) や Fenigstein, Scheier, & Buss (1975) が指摘したように、自己注目を私的自覚状態・私的自己意識特性と公的自覚状態・公的自己意識特性の2つに分けることが可能であり、本研究ではそれぞれの機能に違いがあるという点であった。2つめは、自覚状態が生じた時に Duval & Wicklund (1972) は、当該の人はその状況に関連があるか重要である自己の側面について採用している基準と比較を行うことによって生じる負の感情を解消するための行動が生じるとしているが、そうした過程よりもむしろ、対人場面や社会的場面で活性化された公的自覚によって自分の置かれた状況で必要とされる行動を行うべきなのか否かを判断するために私的自覚状態が活性化し採用している基準を参照するというものであった。これを援助行動との関係から検討しようとしたものである。

自覚状態を私的自覚状態と公的自覚状態とに分けて考えることについて、ここではそれぞれの自覚状態を生じやすくさせる私的自己意識特性と公的自己意識特性から捉えた。これらが1つのものであるとすれば得られる相関は高い値を示すはずである。本研究では私的自己意識特性と公的自己意識特性との間に有意な正の中程度の相関 ($r=0.44$) がみられた。これは従来の諸研究の結果と類似するものである（神田, 2019 を参照）。この結果は私的自己意識特性と公的自己意識特性が関係はあるがそれぞれ独立した特性であることをあらためて確認したこととなる。したがって自覚状態も私的自覚と公的自覚の状態がそれぞれ存在することを類推させるものである。

次にそれぞれの機能についてであるが、2つの自己意識特性は、援助行動のうち「特定の人を対象とする援助行動」とそれぞれ有意で弱い正の相関が得られたが、「不特定の人を対象とする援助行動」とはいずれも無相関であった。また、それぞれの援助行動を施被説明変数とする重回帰分析では、「特定の人を対象とする援助行動」については、統制感、公的自己意識特性及び私的自己意識特性が有意な標準偏回帰係数となった。「不特定の人を対象とする援助行動」については、統制感のみが有意な標準偏回帰係数となった。

分析前の予測では、それぞれの援助行動にたいして両自己意識特性が有意な関係にあると考え

られたが、「特定の人を対象とする援助行動」のみに有意な関係が得られた。まず「特定の人を対象とした援助行動」と両自己意識特性との関係を考察する。

相関分析と重回帰分析の結果から、私的自己意識特性と公的自己意識特性とが「特定の人を対象とする援助行動」と関係することが示された。これは援助行動に両自己意識特性がなんらかの関係を持つことを示している。Duval & Wicklund (1972) が指摘したように自己評価に基づいて自分の行動を改善する過程が関係するのであろうか、あるいは本研究で提案した参照過程が関係するのであろうか。

否定的感情の一つであると考えられる自己嫌悪感との関係について、水間 (1996) は公的自己意識特性との間に有意で弱い正の相関があることを、神田 (2019) は私的自己意識特性及び公的自己意識特性それぞれが対人的自己嫌悪感との間に有意な中程度の正の相関を得ている。これは Duval たちの考えを支持する結果であると考えられる。しかし自己嫌悪感や対人的自己嫌悪感が生じるのはどのようなときであるのだろうか。現実の場面では、おそらく自分の行った行動がうまくいかなかったとき、考えていたことを実行できなかったときあるいは他の人の振る舞いや行動をみて自分のそれと比較することなどによってであることが一般的であると考えられよう。

Table 1 の「特定の人を対象とした援助行動」の各項目をみると、比較的容易に行える援助行動であり、否定的結果に終わる可能性はあまりないと考えてよいであろう。そうであるとすれば、私的自己意識特性の「特定の人を対象とした援助行動」への関係の仕方は参照過程に関わるものであると考えることが適当であると考えられる。

「特定の人を対象とする援助行動」場面に臨んだ場合、公的自己意識特性の高い人は、自己標的バイアスや社会的受容への構えが喚起され、公的自覚が活性化され、これによって私的自己意識特性が関わる私的自覚も活性化し、参照過程へのアクセスが行われると考えることができよう。

では、「不特定の人を対象とする援助行動」にたいして両自己意識特性が関係を持たなかったことはどのように考えればよいのだろうか。「不特定の人を対象とする援助行動」を構成する項目をみると、「献血」「街頭の共同募金」のように援助の対象が明確でない、「災害ボランティア」や「地域社会でのボランティア」は現在経験されている対人関係や社会的関係ではない場合が多いと考えられ、現実に経験されつつある対人場面や社会的場面での援助行動ではないことが関係しているのであろう。

公的自己注目が活性化するのは、今現実に経験されていたり、それが期待される対人場面や社会的場面であるとするならば、今回の結果は理解できるものとなる。

なお、統制感はいずれの援助行動にも有意で弱い肯定的な関係が得られた。これは統制感が一般的期待としてのものであり、自分の行動が期待する結果をもたらすであろうという期待の程度が、弱いながらも各援助行動生起の予測力を持つことが示されたと言えよう。

本研究では、自己注目が生じる際に2つの自覚状態が生じると考え、さらに私的自己意識が関与する私的自覚状態は自己評価過程だけではなく、参照過程がはたらく可能性が示された。しかし「不特定の人を対象とした援助行動」では自覚状態の関与はみられなかった。これについて十分な説明ができたとは言えない。今後、この点を含め自己意識特性と自覚状態の機能についてより精緻な検討が必要であると考えられる。

引用文献

Buss, A. H. (1980) *Self-consciousness and social anxiety*. San Francisco : W. H. Freeman and Wiley.

- Carver, c. S., & Scheier, M. F. (1981) *Attention and self-regulation: A control- theory approach to human behavior*. New York: Springer Verlag.
- Duval, S., & Wicklund, A. (1972) A theory of objective self-awareness. New York: Academic Press.
- Fenigstein, A. (1984) Self-consciousness and overperception of self as a target. *Journal of Personality and Social Psychology*, 47, 860-870.
- Fenigstein, A., Scheier, M. F., & Buss, A. (1975) Public and private self-consciousness. *Journal of Personality*. 43, 544-554.
- Gibbons, F. X. & Wicklund, R. A. (1982) Self-focused and helping behavior. *Journal of Personality and Social psychology*, 43, 462 - 474.
- 鎌原雅彦・樋口一辰・清水直治 (1982) Locus of Control 尺度の作成と、信頼性、妥当性の検討 教育心理学研究, 30, 302-307.
- 菊池章夫 (1988) 思いやりを科学する 一向社会的行動の心理とスキル— 川島書店
- 神田信彦 (2019) 私的自己意識特性と公的自己意識特性に関する一考察 一対人的自己嫌悪感との関係から— 生活科学研究, 41 1-8.
- 水間玲子 (1996) 自己嫌悪感尺度の作成, 教育心理学研究, 44, 296-302.
- 押見輝男 (1991) 公的自己意識が自己標的意識及ぼす影響 島津一夫先生喜寿記念出版会編 現代心理学の諸研究 シーダーカンパニー
- 押見輝男 (2000) 自己意識特性と同調行動 一同調動機と課題関心度の調節効果—心理学研究, 71, 338-344
- 押見輝男・渡辺浪二・石川直弘 (1985) 自己意識尺度の検討 立教大学心理学科研究年報, 28, 1-15.
- 谷伊織 (2008) バランス型社会的望ましき反応尺度日本語版 (B I D R - J) の作成と信頼性・妥当性の検討 パーソナリティ研究 17, 18-28.
- 外山美樹 (2002) 社会的比較志向性と心理的特性との関連：社会的比較志向性尺度を作成して 筑波大学心理学研究, 24, 237-244.
- 山岡重行 (1993) ユニークネス尺度の作成と信頼性・妥当性の検討 社会心理学研究 9, 181-194, 1994
- 山口裕幸 (1988) 成功・失敗経験による注意の方向性の違いが援助行動生起に及ぼす効果 実験社会心理学研究, 27, 113-120.